

1. 問題設定:

なぜ考古学では意識の構造化がおこるのか? : モノの背後に民族や文化、アイデンティティなどが仮構されるのか?

単なるモノの集合体や連続体: それがなぜ統合的な意識や文化的意味を構造化するのか?

課題: ナショナリズムを使わない: ナショナリズムとは異なる局面でも、このような意識の構造化を助長するのはなぜか?

例: 戦前の超国家主義から脱却しようとして、政治色を廃した戦後の考古学においても、「国民考古学」や「捏造」がおこるのはなぜか?

研究の方向性: 考古学の方法自体のなかに問題を探る

これまでの経緯: 考古文化の問題点 民族の実体化

1. 狩猟採集社会と文明の対置: 「未開」イメージの固定化: カラハリ論争

2. 戦後における縄文社会像の変遷:

60年代まで: 稲作の弥生 vs. 狩猟の縄文 「わたしたちの考古学」と日本人の形成

70年代: 「縄文農耕」と照葉樹林文化

80年代: バブル期、縄文も日本の基層文化 意識の肥大化

90年代: バブルの崩壊とは逆に、あるいは経済的崩壊ゆえに、民族的意識はさらに肥大化 前期旧石器の捏造

現在: 旧石器はゆらいでも、縄文は「日本人」の基層を形成

3. ホセ・リサルとフィリピン考古学のはじまり:

これまでフィリピン考古学の父はオトリー・ペーヤー(鹿野忠雄とともに大戦中、博物館の整備) しかしリサルがすでにスペイン植民地フィリピン諸島全体をみずからの故郷として想像:

マドリッドで眼科医を修了後、ウイーンの民族学者ブルーメントゥリットのもとへ: ミンダナオの民族調査による民族分布図に触発、オーストリア民族学会員 スペイン到来以前のフィリピン諸島社会の復元作業: ヨーロッパ留学生会の会長職を利用して、各国で学ぶフィリピン留学生に大航海時代の記録をタガログ語翻訳させる: 自らアントニオ・モルガ『フィリピン諸島誌』を翻訳 詩作、小説でフィリピン独立革命の精神的支柱となる 過去を想像し、未来の規範とする: 革命の到達点: 痛恨の過去(近い過去、植民地期)と革命の理想としての自由な過去

4. 「[考古文化]人」の形成: 考古遺物の背後に、かつて存在した人間集団やその精神的内面までも実体化 60年代に「伝統的」考古学として批判を受ける(Binform and Binford 1973 *New Perspectives in Archaeology*): チャイルドに代表される考古文化の「民族性表象」への批判: Binford vs. Borde のムステリアン論争 しかしプロセス考古学の機能主義的枠組も歴史性を廃した行き過ぎ、過度の一般化に対して批判を受ける: 静態から動態へ

2. 考古学の研究法自体のなかに問題をさぐる

1. 考古学がまだひとり分離せず、美学・建築と未分化に結びついていた時代: ヴィンケルマンからロマン主義

ヴィンケルマン Johann Joachim Winckelmann 1717-68

Gedanken über die Nachahmung der griechischen Werke in der Malerei und Bildhauerkunst, 1755、『ギリシア美術模倣論』、座右宝刊行会、1976年

Geschichte der Kunst des Altertums, 1764、『古代美術史』、初版 1764年刊、中央公論美術出版、2001年

井島勉、ヴィンケルマン、弘文堂、1936

自然よりも古代彫刻を模倣せよ ギリシャ美術は人間に似ていて、しかもそれ以上に美しい: ギリシャ美術の特徴は、気品ある単純と静穏なる威厳 新古典主義、ギリシャ、ローマを理想の過去として模範とする ヨーロッパの形成

「最後に、ギリシャの傑作に通有のすぐれた特徴は、姿勢と表情とにおける気品ある単純と静穏なる威厳とである。あたかも表面はどれほど荒れようとつねに静けさを保つ深海のごとく、ギリシャ彫刻における表情は、どのような激情に際しても、ある大いなる端正な精魂を示している」(P.79)。

「古代美術史」: 美術作品からギリシア民族の精神的特性を抽出 このことによってはじめて、骨董屋的真贋鑑定のみならず、わいから抜け出して、他の学問分野の援けを借りずに、美術自体の中から歴史を見出すという、「美術史学」の自立の可能性が生まれた 彼にとって美術作品とその様式は、単なる物言わぬオブジェではなく、それ自体が人間と同様、生成・発展・成長を遂げる、老化・衰弱・死滅することもあるような一種の有機体

ロマン主義：啓蒙主義の普遍性（ナシオン）に対抗 フォルク：ヘルダー(1744-1803)、普遍的市民観ではなく、民族間の平等、民族文化の担い手としての民衆を強調 同時代のゲーテ：ギリシャ・ローマではなく、それまで下作とされていたゴチックの再評価 ヘーゲルの歴史精神へ：

ヘーゲル Georg Friedrich Hegel (1770-1831) 美術の様式は「**民族精神**」Volksseele の「根本的態度」Grundhaltungen の表出、それが時代の中で、「**自己展開**」を遂げる世界理性の必然的な意識の諸段階を経て成熟し、「**時代精神**」Zeitgeist を形成するという、独特のドイツ的・形而上学的な歴史哲学が出来上がる(『歴史哲学』Vorlesungen über die Philosophie der Weltgeschichte, 1837)：ヴィンケルマンのギリシャ民族の精神性探求とのつながり

2. 日本に考古学がどのようなかたちで移入されたか？

ペトリーは測量技師：ピラミッドの正確な測量、浜田青陵も美術史家、小林行雄は建築家(神戸高工出身、現神戸大学工学部、建築事務所勤務)

モンテリウスから型式学 ひとつの型式とその組列の連なりは文化史的枠組みによって、ひとつの時代と地域を括ることができる 民族(国民)の歴史の探求が開始される

モンテリウス 1903 『考古学研究法』、濱田耕作訳、1932、復刻版、雄山閣出版、1984

濱田耕作 1940 『日本美術史研究』、座右寶刊行会

贄 元洋 1991 「様式と型式」、『考古学研究』38-2: 112-130

古城泰 1998 「形式学的方法の再検討」、『考古学研究』44-4: 34-54

広瀬繁明 1994 「日本考古学の主導者 - ペトリーから濱田耕作が受け継いだもの」、『考古学史研究』3: 73-86

1913年から15年までの3年間のヨーロッパ留学、2年間はペトリーのもと、1年間はフランス、イタリア、ギリシャ遺跡踏査旅行：すでに出発前からペトリー、モンテリウスを知っていた：土器聚成の方法を学ぶ

モンテリウス『考古学研究法』、濱田耕作訳

古い形が何千年も変わらずに残っている東方の保守主義

欧州では形の豊富さ、流動性、変化に対する愛、そしてその結果速やかな進化が行われる (P. 33)

この西方と東方との型式学的対立は非常に古くから顕著であり、又、終始同じであった。この対立は民族性の相違と密接に関係しているものであって、この相違が東方と欧州との民族全体としての進化に重大な意義をもち、これによってその歴史とその対立的関係を、今日なお決定的なものとしている。

組列を進化の系統樹としてイメージする(P.32)。人間が新しい形を作るときには、やはり自然物にもあてはまる進化の法則に従う：『オリентおよびヨーロッパにおける遠古の諸文化期』の一部 ヨーロッパが形成される際のオリентから伝播について書かれた著作：交易と移住が契機

型式学：進化論、モノの形態的進化 「民族」への接近：一括遺物 assemblage：特定の集団の物質的装備一式を「文化」と見做す コッシナー、チャイルド

Graslund, Bo

1987 The Birth of Prehistoric Chronology, Dating methods and dating systems in nineteenth-century Scandinavian archaeology, Cambridge: Cambridge University Press

Jones, Sian

1997 The Archaeology of Ethnicity, constructing identities in the past and present, London and New York: Routledge

『考古学史研究』1号【特集】小林行雄「先史考古学に於ける様式問題」を読む

内田好昭 1992 「先史考古学に於ける様式問題」の成立過程」、『考古学史研究』1: 5-16

「小林行雄「先史考古学に於ける様式問題」付・注解」：17-36

ヨゼフ・ナドラー 1884-1963、1930 『様式史の問題』

作品の底流に潜む普遍性：民族の固有な本質、民族的エネルギー、民族の個性：**様式は通時性**

いっぽう、小林の言う、考古学の様式や型式は、ある時代、ある地域の規範にもとづくもの(P. 23)：**小林の様式の共時性**

小林の様式概念のナドラー「文学史」研究法からのねじれ 小林への影響はナドラーだけではない 建築

建築史のタイプとスタイルの定義；「西洋建築史講義」からの抜粋

人間性の変遷を信じることから、**建築も同様に基本は変わらず**、幾つかの**基本的類型**(「タイプ」Type)からなるはずであると、それらの類型の成り立ちやそれらの組み合わせ方の法則性に注目するもの(「共時的」捉え方)

もう一つは、人間生活の移ろい易さに注目し、それにつれて**変化する建築の姿を様式**（「スタイル」Style）として捉える観方（「**通時的**」捉え方）である。

「スタイル」を内在的なものとして捉え、かつその「**自律的發展**」の法則を見出そうとする努力は19世紀以来、**ドイツの美術史家たちによって続けられる**：様式を支えた「**時代精神**」あるいは**民族性**といった**抽象的・観念的なものを導き出す方向性**：「様式」が云々されるときは、**人びとの一般的な美意識ないしその時代における技術一般の發展段階**という、「**一般化された文化の様式**」に向けられる

まとめ

濱田が持ち帰り、小林（森本）が發展させた、今日の日本考古学へ通じる方法論：

濱田の考古学方法論 調査と聚成・報告の方法重視：ペトリー、モンテリウスの忠実な弟子：美術史家、教養主義的ジェネラリストの側面

小林の「様式論」：土器群の「**斉一性**」、空間的共時性 様式定義のねじれ：理論的根拠を渴望 しかし様式の定義が通時的・共時的いずれにしても、定義自体は重要な問題ではなく、モノの背後に民族、文化を仮構するエピステーメー

『通論考古学』目次 1922

第1編 序論

第1章 考古学とは何ぞや

考古学の起源 / 考古学の語義 / ウィンケルマン / 北欧学者の研究 / 考古学の定義

第2章 考古学の範囲及び目的

人類過去の範囲 / 考古学の時代的区分 / 地理的或は民族的区分 / 資料の種類に本く区分 / 考古学の目的

第3章 考古学と他学科との関係

各学科との関係 / 化学 / 地質学 / 人類学 / 史学

第2編 資料

第1章 考古学的資料の性質

考古学的資料の範囲 / 遺物と遺跡 / 遺物遺跡の名称

第2章 考古学的資料の所在と蒐集

遺物の存在場所 / 資料の採集 / 博物館社寺及個人の聚集

第3章 遺物と其の種類

人類と器具 / 器具の材料 / 石器 / 旧石器 / 原石器 / 新石器 / 骨角器 / 土器 / 土器と考古学 / 金属品 / 装飾品彫刻絵画等

第4章 遺跡と其の種類

墳墓と考古学 / 最古の墳墓 / 石室墳墓及高塚 / 巨石記念物 / 住居跡 / 都市城砦 / 工業交通の遺跡 / 寺院宮殿等の建築

第3編 調査

第1章 考古学的発掘

発掘の価値 / 発掘者 / 人夫 / 発掘用具 / 発掘地点の選定

第2章 発掘の方法

発掘の開始 / 発掘の方式 / 土砂の処理 / 最後の武器 / 発掘者の態度 / 発掘後の処理 / 発掘の遺物 / 荷造

第3章 調査の方法(1)

調査の方法の種類 / 写真 / 拓本 / 紙型、石膏型等

第4章 調査の方法(2)

図写 / 測量 / 記録

第4編 研究

第1章 資料の整理鑑別

資料の蒐集 / 発掘資料の整理 / 偽造と変造 / 鑑識 / 集成の必要

第2章 特殊的研究法

層位学的方法 / 型式学的方法 / 共存関係 / 土俗学的方法

第3章 時代の決定

相対的年代と絶対的年代 / 仮数年代 / 記銘文献に拠る年代決定 / 遺物の存在場所に拠る年代決定 / 型式様式に拠る年代決定 / 絶対年代決定の可能と不可能

第4章 考古学と文献

文献の価値 / 文献の種類 / 文献と遺物との衝突 / 研究の統合

第5編 後論

第1章 考古学的出版

出版の義務 / 報告の時期 / 図版 / 本文 / 体裁

第2章 遺物遺跡の保存

保存の義務 / 石製土製品 / 織物及紙類 / 金属類 / 複製の必要

第3章 遺物遺跡の修理

修理の程度 / 遺物の修理 / 遺跡の修理 / 記念物保存規則

第4章 博物館

博物館の本義 / 博物館の採光 / 陳列の方法 / 附け札と目録 / 博物館と大学学会

附録 主要参考書目解題